

書 評

佐野静代 著

『中近世の村落と水辺の環境史—景観・生業・資源管理』

吉川弘文館 2008年12月 348頁+索引6頁
13,000円+税

本書は、琵琶湖とその沿岸平野部を主な事例とした、湖沼や灌漑用水などの「水」をめぐる、自然と人間との関わりの歴史地理学である。時代的には、書名にある中近世を中心としながらも、必要に応じて、その前後の古代や近現代にも言及されている。収録された旧稿は、1996年から2006年の約10年間に発表されており、近年の歴史地理学の動向を知るのにも適している。本書の書評は、すでに溝口常俊氏によるものがあり¹⁾、本稿では、それとの重複を避けつつ、社会地理学や文化地理学の観点から論評したい。

本書の構成は、以下の通りである。

序章 日本の環境史研究と「水辺」

第I部 河川の中世的開発と村落景観

第一章 古代末期・中世の開発画期と平野部荘園の灌漑水利—近江国野洲川右岸平野を事例として

第二章 中世居館の用水支配機能と村落景観—開発領主と中世村落

第三章 水堀の系譜と城下町の起源—中世村落から「町」へ

補論 近江の織豊期城下町と水運・港をめぐる—「内湖」地形の歴史的利用形態

第II部 湖岸の環境利用と資源管理

第一章 湖の御厨の環境史—近江国筑摩御厨における自然環境と生活形態

第二章 中近世における水辺の「コモンズ」と村落・荘郷・宮座—琵琶湖の「供祭り」と河海の「無縁」性をめぐって

第三章 琵琶湖岸内湖周辺村落における伝統的環境利用システムとその崩壊

第四章 エコトーンとしての潟湖における生業活動と「コモンズ」—近世・近代の八郎潟の生態系と「里湖」の実像

終章 水辺の環境史研究の意義と可能性

あとがき

索引

序章では、まず、本書全体の視座が述べられる。基盤となるのは、人間の生業活動による景観改変というアメリカ文化地理学の視点、景観の形成・利用・管理の主体という社会構造論的な視点、生業を通じた「二次的自然」の共同体による維持という生態学的・資源管理論的な視点である。対象となる「水辺」については、生物多様性の高さが近年再評価されながら、歴史地理学や歴史学での注目は薄かったこと、また地理学の干拓研究では、生産性の低い不毛な空間とされてきたことが批判される。滋賀県の琵琶湖一帯は、中世以来の区有文書など豊富な村落資料に恵まれ、環境社会学や環境民俗学を発展させてきたフィールドでもある²⁾。

次いで、日本における環境史研究の論点と問題点が、世界的な研究動向とも対比されつつ、社会学・民俗学・日本史学など隣接分野も含めて検討される。すなわち、1) 欧米の環境保護思想から出発した環境史 environmental history と非欧米社会の生業活動を扱う歴史生態学とが、方法論的には相互補完的であるため、両者の併用が有効であること、2) 環境社会学のコモンズ論における「伝統社会」像は、必ずしも歴史的検証を経ていないこと、3) 環境民俗学でも、「自然と調和し共生する伝統社会」というイメージが、厳密な実態解明もなく広まっていること、4) 日本史学は、「自然の一部である人間」という生態学的視点を欠くこと、5) 歴史地理学では、日常的な生産活動の結果としての景観や「水辺」への注目が希薄であること、といった諸点である。

さらに、研究対象となるフィールドの環境問題の解決に、歴史地理学も貢献を厳しく求められつつあり、その一方で、環境保護運動で主張される「取り戻すべき自然」や「守るべき自然」が、具体的にどのような状態を指すのか不明であった、という強い問題意識で序章が締めくくられる。

第Ⅰ部は、琵琶湖に注ぐ近江盆地の河川流域を主な対象に、灌漑用水の開削と水田開発の実態、さらに用水支配をめぐる村落の社会構造を主題としたものである。

第一章では、古代末期から中世の野洲川流域（現在の野洲市）を事例に、水利開発の時期と過程の復原が試みられる。日本史学の中世荘園開発の研究を批判し、集落と水路およびその灌漑域としての水田などの諸要素から成る、空間単位としての景観が意識される。開発の時期や状況を直接示す史料がない中で、多数の傍証を駆使し、12世紀における家棟川の付替と祇王井の開削、14世紀における上永原城（在地領主の環濠居館）を中心とした集村化を推定する。家棟川は、近代に入り再び付替えられ、中世の付替部分は、現在は住宅団地を貫く広い舗装道路となっている。往時の面影は望むべくもないが、本章の読後に改めてこの道路を眺めると、歴史のロマンが喚起される。

第二章では、中世の姉川流域（現在の米原市・長浜市）を事例に、居館と水路網の配置や開田区域といった景観と、在地領主による村落支配という社会構造との関係が解明される。本章も日本史学の研究を主に批判し、環濠居館の下流・上流双方の水路網と支配領域としての水田を地域システムとして把握し、景観形成や支配の主体として、在地領主と村落領主という2つのスケールを想定する。いずれの事例でも、居館の在地領主が井堰と水路網全体を支配しており、その庶子でもある村落領主が各支路を掌握し、14世紀前後の村落再編時にも、居館を核とした集村化を主導したとする。事例となった郷里井（横井とも呼ぶ）と出雲井という2つ水路網の井元は、現在では、在地領主の居館があった集落（西上坂と本市場）とは異なる集落（東上坂と間田）となっており³⁾、近世以降、集落間の力関係がどのように変動したのか興味は尽きない。

第三章では、日本の近世城下町の囲郭に必ず「水」が充填されることになった、その起源と理由が解明される。理由については、和歌山・広島などの河口部デルタ地帯の城下町では舟運路、大和郡山・駿府・丸岡といった扇状地や段丘端の城下町では耕地灌漑用水という、機能上の必要性が指摘される。起源については、城下町の「町」の区域は、中世には農民屋敷・耕地であった可能性

を指摘した上で、在地領主主導型の集村における中世居館の水堀（環濠）が、近世城下町の囲郭の起源と推定する。本章の発想は斬新だが、既往研究を巧みに援用した仮説に近く、一貫した事例による実証が今後の課題となる。このような居館主導型の集村のうち、どのような場合であれば、近世以降に町や都市へと発展して行くのかという、中心地理論上の課題にも繋がり得るし、砺波平野など近世の他地域⁴⁾との比較も興味深い。

補論では、「信長時代の長浜・安土・大溝・坂本という琵琶湖岸の4城郭が、湖を挟んでほぼ等距離に位置する」という足利健亮説⁵⁾を受ける形で、信長の湖上水運掌握の意図が解明される。4城郭のうち、長浜（湖名は不明）・安土（大中之湖と小中之湖）・大溝（乙女ヶ池）の3つまでが内湖に面することが指摘され、1）城地近くの城主直轄の軍港、2）町屋地区の商業港、の併設が示される。いずれの本丸も湖水に面していたのは、信長がすでに湖上水軍を統率し、湖上からの攻撃の心配がなかったためである、との指摘は鋭い。南出真助氏は、朝妻港（長浜城にも近い）・大中之湖（安土城付近）・勝野津（大溝城の港の前身）・大津（坂本城にも近い）・塩津という、古代琵琶湖の航路網を示した上で、「奈良―信楽―安土―琵琶湖―勝野―木地山峠―小浜」という古若狭道のルートを推定している⁶⁾。この説が正しければ、琵琶湖内湖の交通上・政治上の価値は、すでに古代から非常に高かったことになる。

第Ⅱ部は、琵琶湖岸の内湖と日本海側の八郎潟を対象に、古代から近代に至る生業活動と自然環境との関わり、さらには資源利用・管理と社会構造との関係を検討したものである。

第一章では、古代の筑摩御厨（現在の米原市）を対象として、自然条件・生息魚種・漁法などから贄人の生活実態が解明される。日本史学の網野善彦氏による「非農業民」論を深化させるべく、「湖沼河海」として一括された水面のうち、「湖」の生活に焦点が絞られる。筑摩御厨では、地引網と築による地先水面での定着漁業に農業が組み合わせられ、網野氏が想定した、船で移動生活する職人的海民は、琵琶湖の場合、贄人ではなく湖上舟運の専門業者であったとする。貢上物であった鮎と鮎との魚類生態学上の違いに着目した箇所、漁獲

河川の現河道と史料との矛盾を解決した箇所などは、地理学的論証として鮮やかである。万葉集・記紀・和歌集などに含まれた古代文学を活用した歴史地理学的研究には、当時の地形環境復原の根拠とするもの⁷⁾、詠み人の心象風景を読み取るもの⁸⁾、という主に2つの視点がある。本章は、前者の立場から、人文学的資料の自然科学的論証への援用可能性を広げるものでもある。

第二章では、中近世の野田内湖・須原内湖（現在の野洲市）と津田内湖（現在の近江八幡市）の周辺集落を事例に、エリ（舩）の共同用益権と村落社会構造との関係が検討される。環境社会学のコモンズ論が、コモンズの近代以前の来歴や権利者の定義をほとんど問題にしないこと、また網野氏が、湖沼沿海を「無縁」あるいは「無所有」としたことへの批判に立脚した章である。コモンズとしてのエリは、中世前期には荘・郷の名主層を成員とする大宮座衆のみに用益権があり、中世末期に至り惣村の全成員に用益権のある村エリが出現し、水辺の資源を享受する範囲が拡大したという。すなわちエリは、歴史を遡るほど、無所有でも私的所有でもない、communal（限られた成員による共同所有）なものであったと結論づける。

第三章では、近世から昭和初期にわたる入江内湖（現在の米原市）とその周辺集落を対象として、生物相を含む自然環境と、その中での生業活動と資源用益の実態、さらには、干拓事業に前後する環境利用システムの崩壊が検討される。入江内湖沿岸では、内湖のほかに里山や外湖（琵琶湖）の浜も含め、生業活動を通じて人間が適度に手を加えることで、持続可能な生態系が成り立っていたという⁹⁾。しかし、大正末期から昭和初期にかけて、下流の河川に堰堤と3つのダムが建設されたことで、琵琶湖に繋がる内湖の水位が低下して生物資源も減少し、他方で動力船の導入などによって主漁場が内湖から外湖に移ったことで、内湖の生業空間としての価値が失われたという。漁業免許申請書の漁場図、県公報の漁業免許告知、土地台帳を照合させ、エリ所有者の変遷を追跡した手法は類例がなく、今後の漁業地理学の手本ともなる。朝妻筑摩のエリがすべて、同一の大地主の名義であったことについては、林野の一般的な場合と同様、名義上は代表者記名として、実質的には集落全体の共有であった可能性もある。

第四章では、近世・近代の八郎潟（現在の秋田県大潟村）とその周辺集落（現在の男鹿市・潟上市ほか）を事例に、海域を含む資源管理や生業活動の実態が解明される。論述内容は、前章の入江内湖のものと同通っているものの、冬の防風垣としてのヨシ利用、海草の生活用品への加工、海水魚の漁撈、水鳥の捕獲など、日本海に面したこの地域ならではの生業活動は興味深く、地域間比較の事例としての意義はある。環境利用を示す断面図（図47）は、第三章（図40・図42）と表現方法をより厳密に統一すれば、比較が容易になったかもしれない。八郎潟については、高度経済成長期の干拓当時の状況や、干拓後の営農過程がすでに解明されており¹⁰⁾、その成果と本章を繋げることで、近世から現代に至る八郎潟の生業史の構築も可能だろう。ただし、干拓地研究ではしばしば、ヨシなどを干拓の障害となる雑草と捉えており¹¹⁾、ヨシの生業上・生態系上の価値を重視する本書の視点とは、対照的である。

終章では、本書全体の結論として、いくつかの知見が述べられる。第一は、平野部では、小規模な湧水・溜池などを水源とする場合、村落が水利共同体となり、中世における惣村の自立化に結実しやすかったのに対し、河川の井堰灌漑による場合は、複数村落を含む広域的な水利共同体となり、中世後期に至っても水利を掌握する在地領主の支配力が保持され、その主導下で集村化が達成された、という知見である。また、湖沼沿岸では、生物資源利用が宮座の成員権と連動しており、中世前期には、荘園を単位として重要資源の用益が名主層に限られていたのに対し、中世後期に至ると、用益単位が下位の村落レベルとなり、その生物資源が村落の自立性を高めて惣村を成立させる基盤となり得た、と指摘する。

第二は、コモンズとしての生業資源の享受範囲や管理秩序は、資源量などの自然条件のほか、社会構造や経済条件の変化によって大きく変動する、との知見である。村落の共有山と個人の持ち山からなる「重層的資源利用」は、自然との共生かつ弱者層の救済に配慮しているとの環境社会学の見解に対して、「重層的資源利用」は共有山が分割私有化される過程の一断面にすぎず、その私有化も資源保護のために採用された村落の戦略で

あった、との指摘は重要である。また、日本の入会地では厳格な管理によって「コモンズの悲劇」とは無縁であった、とする従来の見解への、批判も傾聴に値する。ただし以上の指摘は、第Ⅱ部各章の結論から直接導かれたものとは必ずしもいえず、やや唐突感もある。

第三は、里山と同様に、内湖・潟湖は「里湖」として、人間活動を含み込んで成り立つ「二次的自然」であり、人間が生業活動を通じて生物資源を多様な形で利用することが、水辺の生態系維持の一助になっていた、とする知見である。このような環境利用システム崩壊の契機は、「漁業・農業の複合」から「農業または漁業の専業」への生業形態の分離、ヨシ帯という「水域とも陸域ともつかない曖昧な空間」の埋立てによる「水域と陸域」への分離であったという。しかし、この崩壊は、第Ⅱ部各章で示された通り、ダム建設・干拓事業・漁業技術革新といった、主に村落外部の要因によって生じたものである。近世後期以降、住民の側から干拓推進の動きが出てきたものの、資源の乱獲や汚染などによってシステムが自壊したわけではないことには、留意すべきだろう。

第四は、本書の応用的意義を意識した提言である。すなわち、1) 水辺の保全は、人手を排して放置するのではなく、人間との適度な関わりが必要であること、2) 近年の自然再生事業では、再生すべき「自然」の姿はどの時代のもをモデルにするのか、明確ではないこと、3) 「文化的景観」の保全は、自然環境だけではなく、その自然と適切な関わりを保ってきた地域文化を守ることもである、といった諸点である。

著者は、日本では英語圏諸国と異なり、環境史における地理学の貢献が高くなかったと指摘している。たしかに、地形・地質・気候・生物相などの自然環境、作物の生育や水利、農耕・漁撈などの生業技術と生計活動、それを可能にする資源の利用や管理について、厳密な分析にもとづいて体系立てて論じた歴史地理学的研究は、意外に少ない¹²⁾。本書は、その欠を埋める成果でもあるが、さらなる特徴・意義は以下の通りである。

第一は、水利の社会地理学的研究としての意義である。著者の扱った琵琶湖岸の平野部は、河川灌漑型もしくは河川・井戸灌漑型の地域にあた

る¹³⁾。また歴史的に言えば、弥生時代以来の小河川灌漑を基盤としながら、中世に入って水利の施設や管理方法が改善された地域¹⁴⁾、かつ西日本の灌漑システムの典型的地域¹⁵⁾、と位置づけ得る。従来の社会地理学の水利研究は、時代的には近世もしくは近現代、地域的には奈良盆地・砺波平野・山形盆地などを対象とし、焦点となる社会構造も複数村落間の関係が中心であった¹⁶⁾。第Ⅰ部は、中世以前を扱った点で意義が高いが、今後は従来の社会地理学との間を繋ぐような、近世以降の近江盆地や、中世以前の奈良盆地などの事例研究が要請されよう。例えば、本書で解明された、中世の近江盆地における在地領主支配型の水利体系は、近世に入ってどのような社会構造上の変容を遂げ、それが現代の村落にどのように引き継がれているのだろうか¹⁷⁾。

第二は、社会空間論への貢献である。第Ⅰ部で扱われた、水利を介した在地領主の支配領域に、複数の村落領主のより小さな支配領域が含まれるという、中世における社会空間の重層性の問題は、「基礎地域」の発展過程論¹⁸⁾にも寄与し得る。宮座祭祀と連動したエリ用益権の、荘・郷レベルと村落レベルの併存も、この社会空間の重層性に関わる。著者のデビュー作は、同じく滋賀県を対象とした、古代の一郡内における各氏族の勢力圏を推定した論文であるが¹⁹⁾、これは社会空間論として捉えることも可能であり、水利集団や水運への着目がすでに見られる。また著者の修士論文は、古墳時代の淀川流域（現在の大阪府北部と京都府南部）において、「大盟主—盟主的首長—共同体首長」という勢力範囲の階層構造が、各河川水系を単位とした水利集団の重層構造に対応していたとするものであり²⁰⁾、やはり発想は社会地理学的である。このような問題意識が、第Ⅰ部にも受け継がれているとみれば、第Ⅰ部の位置づけは理解しやすくなる。

第三は、いわば「水の地政学」という視点が、各章に通底していることである。例えば、1) 中世の在地領主居館の水堀が農業用水に直接連なり、時に居館自体が水路分岐点の大元に立地していたこと、2) 水支配を保持し続けた中世領主が、中世居館から近世城下町への発展主体となった可能性があること、3) 内湖が、古代における天皇貢進のための所領、中世の琵琶湖水軍の根拠

地、信長が建設した城下町の軍港・商業港として、政治上の重要拠点となってきたこと、4) 内湖沿岸で強力な権利を持った村落や集団は、琵琶湖と内湖を繋ぐ舟運路や、その付近の大規模なエリの用益権を押さえていたこと、といった論点は、それを良く示している。その結果、近江盆地ひいては日本全体の政治史・生業史における、内湖の重要性が明らかになり、著者も将来の「内湖史」への展開を唆している。

第四は、学際的視野から多彩な資料と方法を駆使し、隣接分野に対して歴史地理学の存在意義を示した点である²¹⁾。例を挙げると、空中写真、地形図、地質断面図、動植物に関する文献、古墳分布、条里地割、発掘報告書、木簡、和歌集、中世の検注帳、中近世の区有文書・神社文書、近世の水論絵図、明治期以降の地籍図・土地台帳・埋立申請書・水利調査・漁獲調査、聞き取りなどである。第Ⅱ部では、近世と近現代の内湖・潟湖をめぐる複合生業形態が解明されたが、民俗学の複合生業論では、各時代の生業形態の正確な復原や、歴史の変遷に関する議論が要請されつつあり²²⁾、本書は時宜を得た成果である。歴史学的な論証の妥当性については、今後の論評を待たねばならないが²³⁾、日本史学では、歴史地理学を代表する環境史研究として、また「水辺エコトーン」の重要性を指摘した研究としても評価されている²⁴⁾。

このように優れた点の多い本書であるが、若干の疑問もある。第一は、先行研究、特に日本史学の成果の扱いである。著者は、本書の位置づけに、日本史学の議論を強く意識している。これは、環境史研究に地理学の成果が少ないことのほかに、日本の歴史地理学が伝統的に、地理学内部での評価よりも、日本史学における評価を強く意識してきた面があることとも、無関係ではないだろう。本書では特に、網野善彦氏の「無縁」論が批判の対象となっている。しかしながら、網野氏の議論は元来、都市的な場における寺社・港・宿などを対象としており²⁵⁾、「山河野海」とはそこに立地する道路や市町を主に指し、浦浜や野山も定着民ではなく移動民の視点から把握されている²⁶⁾。さらに、この「無縁」論は、精緻な実証研究にもとづくものというよりは、発想の提示という性格が強い。以上を考慮すれば、都市的な場

ではない、村落の定着民の生業を扱う本書が、網野氏の議論に正面から取り組む意義が見え難い。

第二は、これも先行研究の扱い方に関わるが、環境社会学のコモンズ論の評価についてである。著者も踏まえる通り、英語圏発祥のコモンズ論は、日本における従来の入会林野論や漁場用益論などと、対象や視点が一面では非常に近い²⁷⁾。環境社会学者や環境民俗学者はそのことを十分に承知しながらも、従来の入会論を深く検討することなく、コモンズ論として自らの研究を位置づける傾向が強い²⁸⁾。本書も、コモンズ論への批判にもとづいて研究意義を主張している。コモンズ論の長所は、英語圏の議論と日本での議論との架け橋となり得る点であろう²⁹⁾。ただし、その前提として、日本における従来の入会林野研究³⁰⁾や漁場用益研究³¹⁾の膨大な成果を、英語圏のコモンズ論と対照させて再評価する必要がある。また、本書が批判する環境社会学における「みんなのもの」という議論は、川本彰氏らの村落領域論・土地総有論を踏まえてのものであり、論点はいわば「総体としてのムラ」とイエとの関係にある³²⁾。以上を考慮すると、本書がまず検討すべきだったのは、環境社会学の議論よりもむしろ、法社会学や経済史学なども含めた、従来の日本の入会地研究ではなかっただろうか。

第三は、資料的限界に起因する問題である。本書は、歴史学における時代区分をものともせず、時には千年以上という非常に長期の歴史を扱う。ただし、地形、生物相、土地利用、生業活動、エリや水辺の用益権、生態系の循環などの各々について、各時代の実態が逐一明らかにされているわけではない。資料の残存状況に応じて、ある要素はこの時代、別の要素は別の時代、といった形で論述されている。それは止むを得ないが、特に第Ⅱ部第三章における環境利用システムの模式図(図39・図40)が、大正期のものしか示されていないことは、やや問題である。本書の論点として、人間の生業活動による生態系の破壊や不調和の歴史という視点が強調されながら、その事例は少ししか言及されず(内湖や潟湖の埋立開田の動きなど)、著者が批判した環境社会学や環境民俗学の「伝統社会における自然との共生」という議論を、結果的には補強している面が強い³³⁾。本書の意義として主張された「歴史的検証」は、むしろ

ろエリ用益権の検討に威力を発揮している。

第四は、全体の構成上の問題である。本書のように旧稿を集成した研究書の場合、内容や体裁の統一に誰もが苦慮する。最新の研究史を踏まえた序論も本全体の結論もない、旧稿を単に並べたものも少なくない。また大学院重点化後、博士号の基準が一般的には著しく低下し、読者から見れば質・量ともに不十分な研究書が増加してきた。本書は、質の揃った旧稿にもとづき、旧稿発表後に出た文献も可能な限り補充し、論旨の一貫性を意識して修正も加えた、良心的な書である。とはいえ、第Ⅰ部と第Ⅱ部との間に内容の乖離が若干見られ、序章と本論各章冒頭との間もしくは本論各章どうしの間に、数段落単位での重複も散見される。また、序章ですでに述べた問題意識と同じ内容が、終章の結論の一部にもなっており、本論での論証過程の意義がやや見え難い部分もある。

このような構成上の問題は、「あとがき」でも触れられているように、著者のキャリアにおける苦渋の反映でもある。法人化以降、大学教員は、社会貢献との関連もあって、研究内容さえも大学の方針に合わせねばなくなってきた。教員養成系学部では、地形学者が地理教育の教材開発や学校安全へと、自らの研究テーマを変えた例もある。本書の著者も、環境関連の部局に奉職したために、現実の環境問題への貢献を厳しく求められ、第Ⅰ部にある水利の社会地理から、第Ⅱ部にある地元琵琶湖の水辺環境へと、テーマの移行を余儀なくされた。しかし、本書が囚らずも雄弁に語るのは、社会貢献への宣言の有無にかかわらず、現象の精緻な分析にもとづいて基礎的な学問的知見を生み出すことこそが、結果的には社会の役にも立ち得ることである。

この逆風の時代に、我々後学の者が本書から学ぶべきことは、著者が学生時代以来、様々な出会いの中で、学問の視点や方法を真摯に吸収してきた姿勢である。例えば、近世城下町プランの変容過程³⁴⁾、微地形・地質断面・遺構・日記・万葉集・地籍図など多彩な資料を組み合わせる手法³⁵⁾、歴史における港や水運の重要性³⁶⁾、地域的な水利体系や地方の水利調査資料³⁷⁾、環境民俗学や生業研究と歴史地理学との接点³⁸⁾、などである。特に、近代地理学における「自然」と「人間」の二

元論への批判³⁹⁾を、実証研究に有効に取り込んだ例は、これまでほとんどなかっただけに、人間を自然の一部とみなし、人間も含めた生態系として地域を捉えた点も、本書の価値である。現時点での環境史研究の到達点を示すものとして、広く読まれるべき書である。

(今里悟之)

〔注〕

- 1) 溝口常俊「佐野静代：中近世の村落と水辺の環境史—景観・生業・資源管理」, 地理学評論82, 2009, 264~266頁。
- 2) 環境社会学の主要論者であった嘉田由紀子氏は、2006年に滋賀県知事に当選した。
- 3) 野間晴雄『低地の歴史生態システム—日本の比較稲作社会論』, 関西大学出版部, 2009, 264頁。
- 4) 橋本征治『ムラとマチの時空—社会と暮らしの地理』, 関西大学出版部, 2008, 125~177頁。
- 5) 足利健亮『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』, 創元社, 2000, 28~29頁。
- 6) 南出眞助「水運と津の発達—琵琶湖・淀川を中心として」(倉田 実・久保田孝夫編『平安文学と隣接諸学 7—王朝文学と交通』, 竹林舎, 2009), 48~67頁。朝妻港は、本書第Ⅱ部の筑摩御厨や入江内湖に隣接していた。
- 7) ①千田 稔『古代日本の歴史地理学的研究』, 岩波書店, 1991, 273~332頁。②日下雅義『古代景観の復原』, 中央公論社, 1991, 59~78頁。
- 8) ①前掲7) ①5~17頁。②千田 稔『風景の構図—地理的素描』, 地人書房, 1992, 144~153頁。
- 9) 次の教科書では、「内湖」の水が洗顔・米とぎ・風呂に利用されていたとするが、内湖は沈殿浄化槽的な汚水捨て場であり、正しくは「外湖」(琵琶湖)の水である。中川 正・森 正人・神田孝治『文化地理学ガイダンス—あたりまえを読み解く三段活用』, ナカニシヤ出版, 2006, 138~139頁。
- 10) 山野明男『日本の干拓地』, 農林統計協会, 2006, 49~80頁。
- 11) 前掲10) 84頁。

- 12) ①千葉徳爾『はげ山の研究』, 農林協会, 1956。②久志哲也「海浜社会の環境利用と資源管理—志摩半島布施田を事例として」(甲南大学総合研究所編『海浜社会の伝統と変容』, 甲南大学総合研究所, 1990), 65~113頁。③小林 茂『農耕・景観・災害—琉球列島の環境史』, 第一書房, 2003, 1~212頁。④前掲3) 29~142頁。
- 13) 田林 明『農業水利の空間構造』, 大明堂, 1990, 68~72頁。
- 14) 前掲13) 76頁。
- 15) 前掲13) 91頁。
- 16) ①堀内義隆『奈良盆地の灌漑水利と農村構造』, 奈良文化女子短期大学附属奈良文化研究所, 1983, 1~201頁。②野崎清孝『村落社会の地域構造』, 海青社, 1988, 147~211頁。③前掲4) 55~107頁。④浜谷正人「現代農村の地域秩序とその変容—笹堰水利地域を事例にして」, 史林59, 1976, 227~261頁。
- 17) 近現代の近江盆地における水利集団の灌漑域と水源は, 全県スケールですでに体系的に明らかにされている。前掲3) 251~309頁。
- 18) 水津一朗『新訂 社会地理学の基本問題—地域科学への試論 (増補版)』, 大明堂, 1980, 136~137頁。
- 19) 佐野静代「近江国伊香郡における式内社と氏族」, 人文地理45, 1993, 83~97頁。
- 20) 佐野静代「古墳時代における政治領域の空間構造—淀川流域をめぐって」, 人文地理47, 1995, 131~154頁。
- 21) このことは, すでに日本史学でも評価されている。橋本道範「『環境史』研究の可能性—佐野静代氏の業績の検討から」, 歴史科学196, 2009, 42~43頁。
- 22) 今里悟之「定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として」, 日本民俗学240, 2004, 2~3頁。
- 23) 次の文献は, 本書の旧稿の史料解釈や方法に疑問を呈している。前掲21) 44~49頁。
- 24) ①高木徳郎『日本中世地域環境史の研究』, 校倉書房, 2008, 29頁。②橋本道範「日本中世における水辺の環境と生業—河川と湖沼の漁撈から」, 史林92, 2009, 6頁。
- 25) 網野善彦『増補 無縁・公界・衆—日本中世の自由と平和』, 平凡社, 1987。
- 26) ①前掲25) 168頁。②網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』, 岩波書店, 1984, 29頁。
- 27) 英語のcommonsの概念は元来, 個人有ではない「自由財」を指し, 誤訳の結果として日本語の「コモンズ」が指すことになった「共有地」の意味は, そこに含まれていなかったという。嘉田由紀子「村落社会研究は環境問題にどうアプローチできるか?」(日本村落研究学会編『年報村落社会研究32—川・池・湖・海 自然の再生 21世紀への視点』, 農山漁村文化協会, 1996), 20~22頁。
- 28) ①井上 真「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」(井上 真・宮内泰介編『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える』, 新曜社, 2001), 7~8頁。②菅 豊『川は誰のものか—人と環境の民俗学』, 吉川弘文館, 2006, 6~10頁, 68頁。
- 29) 例えば, 次の事例比較がある。三俣 学・室田 武「環境資源の入会利用・管理に関する日英比較—共同的な環境保全に関する民際研究に向けて」, 国立歴史民俗博物館研究報告123, 2005, 253~323頁。
- 30) 藤田佳久「入会林野と林野所有をめぐって—土地所有から土地利用への展望」, 人文地理29, 1977, 54~95頁。
- 31) 河野通博『漁場用益形態の研究』, 未来社, 1962。
- 32) 藤村美穂「『みんなのもの』とは何か—むらの土地と人」(井上 真・宮内泰介編『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える』, 新曜社, 2001), 39~43頁。
- 33) ほぼ同様の批判は, すでに日本史学からも出されている。前掲21) 47~49頁。
- 34) 矢守一彦『都市プランの研究—変容系列と空間構成』, 大明堂, 1970, 247~285頁。
- 35) 千田 稔『埋もれた港』, 小学館, 2001, 24~268頁。
- 36) 前掲35) 7~23頁。
- 37) 前掲3) 251~337頁。
- 38) 篠原 徹「環境民俗学の可能性」, 日本民俗学200, 1994, 111~125頁。
- 39) 前掲8) ②265~268頁。